

「稲」俳句会主宰 山田真砂年

「世の中広くなりました。」と言ってくる人がいた。俳句を始めて一年経った人だ。一年前、「俳句を始めると、これまで気がつかなかった道端の草や木々の芽吹きに気がついて、新しい世界が見えてきて世の中広くなります。」と話したことが実感されたと言う。見慣れた景色に新たな発見をするたびに、まるで世界が広がっていくような感覚。今まで見落としていた美しさが目に映ると、人生の豊かさが増していく。四月はそんな季節だ。

1日「四月馬鹿」

分数も逆立ちもダメ四月馬鹿 中村晃也

2日「下廝」

下萌や瓦礫の里の刻遅々と 矢代靖子

3日「青き踏む」

ジグザグに進む斜面や青き踏む 林 恵美子

4日「野火」

天竜川を遡る野火一途なる 北原昭子

5日「清明」

清明や智恵子の空が東京に 小見戸 実

6日「桜」

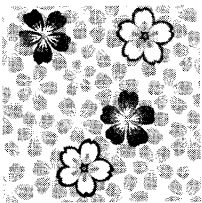
手のひらを空に遊ばせ散る桜 池田角之助

7日「放哉忌」

腰掛けにほど良き石よ放哉忌 中村かりん

8日「仏生会」

子等跳ねて甘茶の香り仏生会 今村博子



9日「小袖納」

小袖納名残の香りもろともに 堀潤子

10日「蜩蚪の紐」

蜩蚪の紐吾もずるりと生まれしか 高田峰

11日「菜の花」

菜の花はさみしき花や群れて咲く 田村子カ

12日「啄木忌」

啄木忌働く人の帰る刻 飛田小馬々

13日「逃水」

逃水や母の言葉を聞き流す 瀧本萌

14日「杏の花」

夕闇のそこだけ真白花杏 大和田美和子

15日「うららか」

スマツシユを打つのが嫌ひ春うらら 戸上晶子

16日「馬酔木の花」

蹲の柄杓の水や馬酔木咲く 深野怜

17日「春愁ひ」

相づちをうつ人の亡く春愁ひ 藤巻佳子

18日「浅蜩」

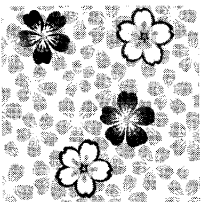
鍋の中次々に咲く浅蜩かな 山本ルミ

19日「風船」

風船よ飛べ戦乱のつづく国 伊藤素木

20日「古巢」

混みあへる枝を払へば古巢かな 関口敦子



21日「遍路」
遍路笠少しは若く見ゆるらし 上田信隆

22日「植樹祭」
師の声と思ふ風音植樹祭 久保千恵子

23日「木瓜の花」
路上駐車で休むタクシー 木瓜の花 滝代文平

24日「春日傘」
しんがりの高く上げたる春日傘 くぼ六茶

25日「目借時」
ララバイララバイ蛙の目借時 原田白鷗

26日「諸子」
焼諸子つまみ船待つ竹生島 伊津野均

27日「春惜しむ」
制服の少しなじみて春惜しむ 相澤美佐子

28日「行く春」
行く春や外出用の靴磨く 浜田優子

29日「みどりの日」
宇宙から見えるこの星みどりの日 池田美和

30日「荷風忌」
潮の香の混じる川風荷風の忌 大坪正美

